『信仰のルーツを問う』ヨハネ8:37-47

8:37 わたしは、あなたがたがアブラハムの子孫であることを知っている。それだのに、あなたがたはわたしを殺そうとしている。わたしの言葉が、あなたがたのうちに根をおろしていないからである。
8:38 わたしはわたしの父のもとで見たことを語っているが、あなたがたは自分の父から聞いたことを行っている」。
8:39 彼らはイエスに答えて言った、「わたしたちの父はアブラハムである」。イエスは彼らに言われた、「もしアブラハムの子であるなら、アブラハムのわざをするがよい。
8:40 ところが今、神から聞いた真理をあなたがたに語ってきたこのわたしを、殺そうとしている。そんなことをアブラハムはしなかった。
8:41 あなたがたは、あなたがたの父のわざを行っているのである」。彼らは言った、「わたしたちは、不品行の結果うまれた者ではない。わたしたちにはひとりの父がある。それは神である」。
8:42 イエスは彼らに言われた、「神があなたがたの父であるならば、あなたがたはわたしを愛するはずである。わたしは神から出た者、また神からきている者であるからだ。わたしは自分からきたのではなく、神からつかわされたのである。
8:43 どうしてあなたがたは、わたしの話すことがわからないのか。あなたがたが、わたしの言葉を悟ることができないからである。
8:44 あなたがたは自分の父、すなわち、悪魔から出てきた者であって、その父の欲望どおりを行おうと思っている。彼は初めから、人殺しであって、真理に立つ者ではない。彼のうちには真理がないからである。彼が偽りを言うとき、いつも自分の本音をはいているのである。彼は偽り者であり、偽りの父であるからだ。
8:45 しかし、わたしが真理を語っているので、あなたがたはわたしを信じようとしない。
8:46 あなたがたのうち、だれがわたしに罪があると責めうるのか。わたしは真理を語っているのに、なぜあなたがたは、わたしを信じないのか。
8:47 神からきた者は神の言葉に聞き従うが、あなたがたが聞き従わないのは、神からきた者でないからである」。

●序論
「ルーツ」という言葉。最近では、さまざまな国同士、地域紛争の背景にそれぞれが抱えるルーツをめぐる問題があり、それゆえに”根深い”と言われ、ときには”修復不能”とさえ言われることがあるのです。
今、わたしたちの身近でルーツというとき、それは先祖や家系、生い立ちのことを表現することがあります。

クリスチャンはキリストを信じて新しくされたその瞬間から、わたしのルーツはこのキリストにあると言えます。
キリストに向き直り、これまでのルーツはすべて主の前でつくりかえられて「神の子」とされて生きることだからです。そうしてすべてが変えられるのです。
　　5:17 だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られた者である。古いも

のは過ぎ去った、見よ、すべてが新しくなったのである。
5:18 しかし、すべてこれらの事は、神から出ている。･･･
今日の結論はここにあります。
たとえどんな過去や生い立ちを持つ人でも、「わたしの信仰のルーツはキリストにこそある！」と。それがすべてのクリスチャンが得ている恵みであるということです。

●本論
Ⅰ．アブラハム・ルーツへのこだわり
イエスさまはこう言われました。
8:37 わたしは、あなたがたがアブラハムの子孫であることを知っている。それだのに、あなたがたはわたしを殺そうとしている。わたしの言葉が、あなたがたのうちに根をおろしていないからである。
そこでイエスさまが語るのは、アブラハムの子孫であるとのこだわりを語りながら、イエスさまに耳を傾けないことに矛盾があるじゃないか…ということです。
アブラハムならそんな態度はとらない…ということです。
彼らは、そんなイエスさまの言葉に対して重ねてこう答えます。
8:39 彼らはイエスに答えて言った、「わたしたちの父はアブラハムである」。
だからさらにイエス様も答えます。
イエスは彼らに言われた、「もしアブラハムの子であるなら、アブラハムのわざをするがよい。

アブラハムにならうということについて。
彼は、どんなに聖書に精通し、そして律法を丁寧に守っていたか…ということではありません。彼の当時その両方ともありませんでした。それでも彼は「信仰の父」と呼ばれる、そこには確かに神さまを信頼するありさまがあったからです。
ただそんな彼もいつも問題なく、失敗を犯さず歩むことができたかというとそうではない。　それでも、彼が信仰の父と呼ばれるようになったの理由は、かれはその生涯を通して「神さまと共に歩み」、そして色々な経験を経て「神さまとの親しい関係」を習熟させ、また成長させていただいた人であったからだということです。
ある人は、こんな風にお話になります。
こと創世記に見る神と人間との関係に関してカギになる言葉は「従う」とか「信じる」ではなく、「歩む」「歩く」という言葉ではないか…と。
17:1 アブラムの九十九歳の時、主はアブラムに現れて言われた、「わたしは全能の神である。あなたはわたしの前に歩み、全き者であれ。
かつて天に上げられたエノクが、そしてノアが「神と共に歩んだ」と記され、祝福されたことが記されています。
アブラハムにルーツを見るならば、その「神さまとの歩み」にこそルーツなのです。

Ⅱ．悪魔の働きの現実を知る
イエスさまは、ここで目に見えない霊的存在をあぶりだしてこう語ります。
8:44 あなたがたは自分の父、すなわち、悪魔から出てきた者であって、その父

の欲望どおりを行おうと思っている。彼は初めから、人殺しであって、真理に立つ者ではない。彼のうちには真理がないからである。彼が偽りを言うとき、いつも自分の本音をはいているのである。彼は偽り者であり、偽りの父であるからだ。

もちろん、この民は自分たちが悪魔の手先になっていて、その思いや態度や行動がその悪魔にコントロールされている…などとは思ってもいなかったでしょう。

そんな風に人に隠れ、気づかれずにいて、それでいてキリストとその福音を巧みに否定し退けようとする巧妙な働きをする。それがサタンの意図するところであり、その偽りと惑わしに、この民はくしくも用いられているというありさまが語られています。

イエスさまと対峙した民は、自分たちはアブラハムを父と主張し、そしてさらには神をも父と主張して立ちました。

8:41 ･･･「わたしたちは、不品行の結果うまれた者ではない。わたしたちにはひとりの父がある。それは神である」。

それに対してイエスさまは

8:42 ･･･「神があなたがたの父であるならば、あなたがたはわたしを愛するはずである。わたしは神から出た者、また神からきている者であるからだ。わたしは自分からきたのではなく、神からつかわされたのである。

少しいびつなやりとりに聞こえるでしょうか。

それでもなお、このイスラエルの民と向きあって、御自分を示し、福音を語り、そして真理を宣べられる、そこにイエスさまは民の救いへの関心と熱意があるのです。

そんなイエスさまの姿を思い見て、パウロは若い伝道者に向けてこう語っていることは、わたしたちも学ばされます。

2テモテ2:23-26

2:23 愚かで無知な論議をやめなさい。それは、あなたが知っているとおり、ただ争いに終るだけである。

2:24 主の僕たる者は争ってはならない。だれに対しても親切であって、よく教え、よく忍び、

2:25 反対する者を柔和な心で教え導くべきである。おそらく神は、彼らに悔改めの心を与えて、真理を知らせ、

2:26 一度は悪魔に捕えられてその欲するままになっていても、目ざめて彼のわなからのがれさせて下さるであろう。

Ⅲ．キリストをルーツとする

先週の繰り返し読み上げた御言葉を思い起こしてください。

8:36 だから、もし子(キリスト)があなたがたに自由を得させるならば、あなたがたは、ほんとうに自由な者となるのである。

わたしは先週、【（キリストの）真理が（わたしたちに）もたらす（罪からの）自由がある！】と言い、「神さまから始まる本物の自由」とも表現しました。

わたしたちが信じる福音の祝福は、「神さまはじまり」だからこそ意味があるのです。

今日、アダムとエバやエノクやノアの子ともちらっと触れました。

そこで、彼らは「神と共に歩んだ」と表現しました。

しかし真実は、「神さまが彼らとともに歩んでくださった」ということです。
その歩みは神さまが近づいてくださって、共に歩んでくださったからこそ、人の思いの浮き沈みにいっさい左右されない、祝福の世界を見ることができるのです。

そういう意味で、信仰の先輩者たちが経験した信仰の成長もそして祝福もすべて「神さまはじまり」のもの神をルーツとする信仰生活です。

そしてイエス・キリストは今日わたしたちに向けてこう語ります。
8:47 神からきた者は神の言葉に聞き従うが、あなたがたが聞き従わないのは、神からきた者でないからである」。
それは、自分のルーツを神さまの側に置き換えた者は、キリストの言葉に聞き従うが、悪魔の偽りの中で、自分の力と正義に頼る人は、キリストの言葉を受け入れない者となる言うことです。
赦し、救い、自由のある世界は、いつでも神さまはじまりであり、神さまがくださるからこそ、それは本物なのです。
8:36 だから、もし子があなたがたに自由を得させるならば、あなたがたは、ほんとうに自由な者となるのである。

●おわりに
今日イエスさまがお話になっている人々は、30節のところで「多くの人々がイエスを信じた」と言われたその人たちでした。けれども、イエスさまとの対話で彼らの心が探られています。
それは、その信仰のルーツを、イエス・キリストに置き換えていないことへの気づきをうながしていました。
彼らが手放せなかったものは、神由来のものではなく、人由来の誇りでした。
わたしたちにチャレンジされるのは、イエスさまを自分の救い主キリストとして受け入れることです。そして新しくされることです。
2コリント5:17-
5:17 だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られた者である。古いものは過ぎ去った、見よ、すべてが新しくなったのである。
そしてはっきりこう述べます。
5:18 しかし、すべてこれらの事は、神から出ている。
そしてさらにこう言われるのです。
神はキリストによって、わたしたちをご自分に和解させ、かつ和解の務をわたしたちに授けて下さった。
わたしたちはキリストに信仰のルーツを持ち、そして救いの中に生きています。さらには、この和解の福音、つまりキリストにルーツをもって救われるための福音宣教をわたしたちにゆだねてくださっていることを、ぜひ覚えていたいですね。